

平成30年6月8日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02179

研究課題名(和文) マレーシア美術(1960-80年代)にみる現代美術の同時代性についての考察

研究課題名(英文) Consideration of contemporaneity in contemporary Malaysian art from the 1960s to the 1980s

研究代表者

石松 紀子 (Ishimatsu, Noriko)

広島市立大学・芸術学部・准教授

研究者番号：70724037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：1960年代から1980年代までのマレーシア美術に関わる資料を収集すると同時に、1960年代に欧米に留学したあと、マレーシアに新しい美術様式を導入したアーティストたちに聞き取り調査を行った。また、マレーシア美術の転換点ともいえる1971年のNational Cultural Congressに関する資料を収集し、マレーシア美術への影響を検証した。これらの研究調査を通して、マレーシア美術における欧米美術の受容と反発の相互関係について考察を深めた。

研究成果の概要(英文)：In the research project, I collected materials and books related to Malaysian art from the 1960s to the 1980s as well as interviewed with artists who studied in Europe or US and introduced new art forms in Malaysia. I also collected materials related to the National Cultural Congress in 1971, which could be considered as the turning point for Malaysian art, and examined the impact of the congress on it. Through the research, I deepened my consideration of interrelation between reception and rejection of the Western art in Malaysia art.

研究分野：現代美術

キーワード：マレーシア美術 アジア美術 同時代性 アイデンティティ 植民地政策

1. 研究開始当初の背景

冷戦構造が崩れた 1990 年代以降、美術分野においても急速なグローバル化が進むに伴い、世界各地で開催される国際展においてアジアの現代美術も積極的に取り上げられるようになる。しかし、1980 年代以前のアジア美術については、ほとんど国際的な関心を獲得することなく、欧米を中心とする美術史や美術言説においてもほとんど語られてこなかった。

申請者は、これまでイギリスにおける移民や人種問題を考えながら、アジア、アフリカ、西インド諸島に出自をもつ非欧米系アーティストたちに焦点をあて、非欧米圏の美術にみられる周縁性の問題について研究調査を行ってきた。この研究をとおして、欧米諸国による帝国主義や植民地政策が進められた近代に、現代まで続く美術史や美術言説が形成されその基盤が欧米中心であるために、非欧米圏の美術をその文脈で語る事が難しく、そのような基盤がないことを非欧米圏美術の周縁性の問題として捉えた。

また、2011 年から 2012 年まで、日本財団のアジア・フェローシップにおいて、1960 年代から 1990 年代までのマレーシアとタイの美術状況について現地調査を行った。この研究調査では、美術館や大学といった美術機関が果たした役割について考察すると同時に、被植民地国であるマレーシアと、非植民地国であるタイを比較することで、植民地支配 / 非支配の美術への影響を検証した。

日本国内では、マレーシアの現代美術に特化した研究調査がすすめられている状況はあまり見られず、マレーシア国内においても、自国の美術史に関する概説的な文献や論文はみられるが、詳細な研究はまだ十分とはいえない。

イギリスやアジアにおける研究調査をとおして、アジア美術の周縁的な問題を克服していくために、欧米中心の美術史を問い直し、アジア美術における同時代性を取り戻しながら、美術史を再考・再編する必要があると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、旧イギリス領であったマレーシアに焦点をあて、独立後の 1960 年代から、急速なグローバル化が始まる以前の 1980 年代までの美術をとりあげ、欧米中心の美術史や美術言説から排除されてきたアジアの現代美術を同じ時代に起きた美術として考察することである。

日本や欧米の美術史研究では、これまでアジア美術を同時代のものとしてとらえる視点が欠落していたため、アジアの美術動向が欧米のそれとどのような連続性を持ち、また反発があったかについて十分な検証がなされてこなかった。

本研究は、欧米とアジアの美術における相互関係を理解することで、欧米中心の美術

史や美術言説を打開し、アジア美術の同時代性を認識するための基礎的な研究になることを目指す。

3. 研究の方法

1960 年代から 1980 年代までのマレーシア美術の動向や、それに関わる欧米美術との影響関係や相互関係を理解するために以下の研究方法を試みた。

- (1) マレーシア美術における植民地政策の影響を理解するために、イギリスの国立公文書館や国立図書館などにおいて調査を行い、1950 年代のイギリス統治時代に設立された Malaya Arts Council や、マレーシア美術のパイオニア的な美術作家たちが学んだ Malayan Teachers Training College について資料を収集した。また、イギリスの Malayan Teachers Training College で学び、マレーシアの独立後も政府の奨学金を得てイギリスの大学へ留学して美術を学んだ美術家ヨー・ジンレン氏に当時の状況について聞き取り調査を行った。
- (2) マレーシアの美術動向の変遷を知るために、マレーシア国立美術館、Malaysia Art Archive & Research Support、シンガポール国立美術館や国立図書館などで文献調査を行い、関連資料を収集した。同時に、マレーシア国立美術館やシンガポール国立美術館において 1960 年代から 1980 年代にかけての美術動向が概観できる展覧会が開催されていたため、作品を実見しながら年代ごとの美術変遷について確認した。また、以前マレーシアにおいて美術批評や展覧会に携わっていた美術史家の T.K. サバパシー氏に当時の美術状況について聞き取り調査を行った。
- (3) ヨーロッパやアメリカへの留学経験があり、1960 年代に抽象美術を積極的に制作した美術家のヨー・ジンレン氏、ジョリー・コー氏、チュオン・ライトン氏に聞き取り調査を行い、当時のマレーシアや海外における美術状況について聞き取り調査を行った。また同氏らが、1967 年に開催した「GRUP」展の回顧展を見学し、当時の作品を実見した。
- (4) 1971 年に開催された National Cultural Congress が、マレーシア美術に与えた影響を考えるために関連資料を収集した。また、この会議に触発され、1979 年にマラ工科大学で開催されたインディジネス・アート・セミナーに関わる資料を収集した。
- (5) 福岡アジア美術館では、マレーシアのア美術作家に関わる資料だけでなく、同時代

のアジア美術を理解するために、1989年から1990年代にかけて福岡市美術館で定期的開催された「アジア美術展」に関わる新聞記事などの資料を収集した。

4. 研究成果

イギリスの調査では、Malaya Arts Councilが主催した展覧会や、初期のマレーシア国立美術館に関する資料を収集することができた。

マレーシアがイギリスから独立してまもない1950年代後半から1960年代にかけて、ヨーロッパやアメリカに留学して美術を学んだ美術家のヨー・ジンレン氏、ジョリー・コー氏、チュオン・ライトン氏に聞き取り調査を行った。いずれも留学先で当時国際的な美術動向となっていた抽象表現主義に触れ、同氏らを含む海外留学経験のある7名の美術家たちが、1967年に「GRUP」展を開催し、グループ展として初めてマレーシアで抽象美術を紹介した。同展は、欧米美術との同時代的な美術動向として多くの美術家たちに刺激を与えるとともに、反発を招くことになる。「GRUP」展に関わる資料や、同展出品作家たちの資料を収集し、その成果は、第93回九州藝術学会（大分市・大分県立美術館）において「1960年代のマレーシアにおける抽象美術について-受容をめぐる対話と抵抗」と題して発表した。

同氏らへの聞き取り調査の際、「GRUP」展の出品作品の所在は不明だったが、2017年に開催された回顧展「GRUP 1957-1973」では、同時代に制作された作品群を実見し写真撮影することができた。

1969年に、クアラルンプールで民族衝突が起きるが、これを契機にマレーシア国内では自国の文化について考える機運が高まっていく。このような背景のもと、1971年にNational Cultural Congressが開催され、この会議での内容を踏まえながら、同年National Cultural Policyが制定される。この会議以前までは、抽象表現主義や構成主義的な美術など、新たな美術形式を追求する美術家たちがマレーシア美術を牽引していたが、この会議以降、美術分野でも独自の文化やアイデンティティについて追求する姿勢が目立つようになるため、マレーシア美術における転換点ともいえるNational Cultural Congressに関連する資料を収集した。その成果については、10th International Malaysian Studies Conference (Universiti Malaysia Sabah, Malaysia)で“Impact of the National Cultural Congress (1971) on Malaysian Art - Exploring Cultural Identity in-between Globalism and Localism”と題して発表し、proceeding (pp.391-399)としてまとめた。

また、National Cultural Congressに触発されて、1979年にマラ工科大学で開催されたインディジネス・アート・セミナーでは、マ

レーシア美術におけるアイデンティティ形成の促進が強調され、このセミナーに関わる資料についても収集することができた。

1970年代以降、マレーシア美術において文化的アイデンティティの形成が重視されるようになるが、この傾向は他のアジア諸国の美術分野においてもみられる。アジアの国々が植民地支配から解放され、独立した国家として発展していく過程で、自らの文化を形成していくことは重要な課題となり、ユネスコの文化政策においても各国の文化的アイデンティティの形成が推進される。このような国際的な潮流は、1979年から福岡市美術館で5年ごとに開催された「アジア美術展」にも反映されており、アジア美術におけるアイデンティティ形成についてより俯瞰的な視点から検証するために、「アジア美術展」に関する資料を収集した。その成果は、『年報カルチュラル・スタディーズ』に、論考「1970-90年代アジアの現代美術における「アイデンティティ」概念の受容と変遷-福岡市美術館の「アジア美術展」を参照して」と題してまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 石松紀子「1970-90年代アジアの現代美術における「アイデンティティ」概念の受容と変遷-福岡市美術館の「アジア美術展」を参照して」『年報カルチュラル・スタディーズ』第6号、2018年、印刷中、(査読有)

〔学会発表〕(計3件)

- (1) 石松紀子「1960年代のマレーシアにおける抽象美術について-受容をめぐる対話と抵抗」第93回九州藝術学会、大分県立美術館、2015年
- (2) 石松紀子「第1回アジア美術展をめぐる国際的な潮流」カルチュラル・タイフーン2016、東京藝術大学、2016年
- (3) Noriko Ishimatsu, “Impact of the National Cultural Congress (1971) on Malaysian Art - Exploring Cultural Identity in-between Globalism and Localism”, 10th International Malaysian Studies Conference, Universiti Malaysia Sabah, Malaysia, 2016

〔図書〕(計 件)

〔その他〕

- (1) Noriko Ishimatsu, “Impact of the National Cultural Congress (1971) on Malaysian Art - Exploring Cultural

Identity in-between Globalism and Localism”, proceedings of the 10th International Malaysian Studies Conference, Universiti Malaysia Sabah, Malaysia, 2016, pp.391-399

6 . 研究組織

(1)研究代表者

石松 紀子 (ISHIMATSU Noriko)
広島市立大学・芸術学部・准教授

研究者番号 : 70724037